

やさしい朝

尾崎昭代詩集



やさしい朝

尾崎昭代詩集



書肆とい

詩集 やさしい朝^{あき}

1993年6月1日 第1刷発行

著 者——尾崎昭代

〒359 所沢市若狭 2—2580—79

装幀者——高島 平

発行所——書肆とい

〒113 東京都文京区本郷 5—21—12—302

☎03—3816—1226

振替東京2—353421

発行者——高橋順子

印刷所——三協美術印刷

製本所——松栄堂

定価 2060円（本体 2000円）

©1993, Akiyo Ozaki

目次

I

春のはじまり	8
花の日	10
やさしい朝	12
朝の食卓	14
花吹雪	18
ある朝	20
気まぐれ	22
初夏	24
洗う	26
惨劇あるいは自由	28
走る街	32
動物園	34
ゆっくり	36
海と空	40
土器をつくる	42
林を歩く	44
風の馬——日光・小田代ヶ原——	46

II

朝の夢	50
知っていること	54
手紙	56
忘れる	58
五月闇	60
待つ	62
月は……	66
真夏日	70
夏の影	72
花の散り方	76
帰路	78
晩秋	80
冬ざれの街	82
ラ・メール	86
新しい年へ	88
あとがき	92

「ラ・メール」に捧ぐ

やさしい朝

春のはじまり

林の陽のあたるところで

すみれがまどろんでいる

萌えはじめたばかりの草のうえに

猫が座っている

前足をきちんとそろえて黙想している

あたりは物語のはじまりに似て

静かだ

ふるさとの日光連山では

雪解け水が流れはじめているだろう

猿たちが餌をさがしているだろう

もう 春

ふたたび 春

桜が咲いて散るだろう

ひかりがあふれてこぼれるだろう

だから この世はうつくしい

あなたが そこにいる

そこで ほほえんでいる

だから

この世は いっそううつくしい

春の幕が あがった

花の日

陽は うらら

世は 事もなし

と いうわけでもなかったが

花びらは フーガのようにこぼれ

鳩は 音符のように歩きまわり

子供たちは ファソラシドと坂をかけあがる

花びらと 雪のひとひらは

同じ速度で 落ちるそうだ

鳥は 魂のかたちをしている

と 誰かが言っていた

あの鳩は

逝ってしまった父 だったのかもしれない

公園の まばゆい春のなかで

しばし この世を忘れよう

楽譜にも 休止符があるのだから

やさしい朝

目が 醒めると

猫が 朝を見ていた

出窓のシクラメンと並んで 見ていた

猫は 三百八十回ぐらいの朝を迎え

わたしは 数え切れないほどの朝を生き
指の火傷の跡もうすくなった

いつもと同じ朝

あわい光の飛沫の中で ささやかな朝食

猫も わたしと同じものを食べている

いい一日のはじまりそうな

卵色のもやのような

やわらかな生きものという 静かな朝

からくり時計の人形が

七つ 鐘を鳴らした

朝の食卓

誰もいなくなったテーブル

開かれたままの新聞紙に

木の芽色の日射しがのびて

無機質の活字はすこしばしく見える

世界のどこかでは血も流されているというのに

ここは 地球でないように静かだ

ばらばらの角度で向き合っている

主のいない四脚の椅子

クッションはとくに冷えている

猫が尻尾の切れたトカゲを運んでくると